

# 新館遺跡 発掘調査報告書

1988

山形県  
山形県教育委員会

# 新館遺跡

## 発掘調査報告書

昭和63年3月  
山形県  
山形県教育委員会

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した県道平塩・山辺線改良工事に係る新館遺跡発掘調査の成果をまとめたものであります。

調査の結果、平安時代から鎌倉時代にかけての一般の集落跡が検出され、堅穴住居跡や掘立柱建物跡・倉庫跡など各時期に応じた生活の様子を再現することができました。発掘した場所は、遺跡の北西部にあたる道路敷地内だけですが、建物跡や溝跡の方向に規則性がみられ、ある約束ごとによって屋敷を作ったことがうかがえます。

山辺町は、県下でもっとも早く古代の条里遺構が学術的に解明された所であり、また縄文時代から江戸時代にわたる各時代の特徴ある遺跡がみられる地域もあります。

近年、県内各地での開発事業に伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護との調整は重要な行政課題であり、県教育委員会においても今後鋭意努力を続けてまいる所存であります。

終わりに、調査にあたって多大な御協力をいただいた地元の方々を始め関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和 63 年 3 月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

# 例　　言

- 1 本報告書は、山形県土木部道路建設課の委託を受けて、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した県道平塙・山辺線特殊改良一種工事に伴う「新館遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり昭和62年8月24日から10月27日まで延31日間の日程で発掘調査を実施した。
- 3 本遺跡の所在は、山形県東村山郡山辺町大字大寺字西光山1742番地外にある。「山形県遺跡地図」には遺跡番号355新館遺跡として記載された周知の遺跡である。
- 4 調査体制は、次のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治(山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査)

佐藤 庄一( 同 埋蔵文化財係長)

同・現場主任 佐藤 正俊( 同 主任技師)

調査員 斎藤 裕幸(山形県埋蔵文化財緊急調査団 調査員)

事務局 事務局長 後藤 茂彌(山形県教育庁文化課 課長)

同補佐 土門 紹穂( 同 課長補佐)

事務局員 長谷部恵子( 同 主事)

同 氏家 修一( 同 主事)

同 高橋 春雄(山形県埋蔵文化財緊急調査団事務局員)

- 5 発掘調査にあたっては、山形県土木部道路建設課・山形県山形建設事務所・山辺町教育委員会・山辺町大寺公民館・山形県東南村山教育事務所

- 6 本報告書の作成は、佐藤庄一・佐藤正俊・渋谷孝雄が担当し、第I章は佐藤庄一が、第II・III・IV・V章を佐藤正俊が、第VI章2・第V章2については渋谷孝雄が分担し執筆した。図面の整理は斎藤裕幸、遺物の整理・拓本実測・トレース・版組などの作業は布施明子・澤村正子の補助を得た。

本報告書の編集は、阿部明彦・佐藤正俊が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

## 凡 例

- 本文中の土色については、「新版標準土色帖」(小山・竹原1970)に準拠した。
- 挿図中の土層断面図の水系レベルは、すべてBM標高で記載した。標高杭は22-41グリッド内に設定しBM=97.00mとした。
- 遺構は発見された順序に一連番号を付し、住居跡や建物跡外に伴う柱穴などについては各挿図每一連の数字で示した。本文や挿図中で使用した記号は、S T - 建物跡・S B - 建物跡・S K - 土杭・S D - 溝跡・S X - 性格不明・E P - 住居跡・建物跡の柱穴・E D - 建物跡の溝跡・E L - カマド跡・R P - 一括土器である。
- 挿図中の方位は磁北を示している。遺構の挿図縮尺は遺跡全体図では1/1000、遺構全体図では1/150、住居跡・土杭・溝跡では1/40、建物跡では1/60を、土器片の拓影図では1/4を原則として、それぞれにスケールを示した。図版中の遺物は1/3とした。

## 目 次

I 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
II 調査の経緯	
1 調査に至る経過	3
2 発掘調査の経過	3
III 遺跡の概観	
1 調査の方法	6
2 遺跡の層序	6
3 遺構の分布	9
IV 遺構と遺物	
1 検出遺構	10
a 壺穴住居跡	10
b 掘立柱建物跡	10
c 土坑	18

d 遺構・柱穴群	18
2 出土遺物	21
V 調査のまとめ	
1 遺 跡	23
2 遺 構	23
3 遺 物	24
(参考文献)	24

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置・周辺遺跡図	15
第2図 遺跡全体図	5
第3図 遺構全体図	7
第4図 遺跡層序図	9
第5図 10号住居跡	11
第6図 15・16号建物跡	13
第7図 17号建物跡	15
第8図 18号建物跡	15
第9図 土 坑 群	17
第10図 溝 跡	19
第11図 溝跡・柱穴群	20
第12図 出土遺物拓影図	22

## 図 版 目 次

図版1 遺跡近景 調査区近景	図版7 15・16号建物群(3)
図版2 調査区全景(1)・(2)	図版8 15号建物雨落溝跡 17号建物跡
図版3 1号不明遺構・3・4号土坑外	図版9 18号建物跡 12号土坑外
図版4 調査区中央部全景 5号溝跡外	図版10 R P 1出土状態 R P 2出土状態
図版5 10号住居跡(1)・(2)	図版11 出土遺物(1)
図版6 15・16号建物跡群(1)・(2)	図版12 出土遺物(2)

## 付 表

新館遺跡と周辺遺跡一覧	2	新館遺跡発掘調査工程表	4
-------------	---	-------------	---

第1図 遺跡位置・周辺遺跡図 ( $S = 1 : 50000$ )

# I 遺跡の立地と環境

## 1 地理的環境

山形盆地は、最上川の流域に並ぶ盆地列の一部であり、東に奥羽山系の藏王連峰が連なり、西は白鷹山を最頂とする白鷹丘陵によって区画される。盆地面積は約400km<sup>2</sup>で、南北40km、東西10kmの南北に長く、東西断面は舟底状を呈する。須川は、藏王山系の舟引山・二ツ森山付近より発し、山形盆地の西線部を北流し最上川に合流する。

新館遺跡は、山形県東村山郡山辺町大字寺宇西光山1742ほかに所在し、地形的には山形盆地の西線、須川の西岸に位置する。須川の西岸は、盆地の東側に発達した馬見ヶ崎川や立谷川の扇状地によって、須川の流路が山形盆地の西側に押しやられ、盆地西縁を区画する白鷹丘陵に近接している。同丘陵から平野部へ移行する付近は、平地が樹枝状に入りこみ、標高200～400m程のなだらかな丘陵より東流する数条の小河川が谷を刻んでいる。丘陵より流下するこれらの小河川は、小規模な扇状地を連接して形成しており、またこの地形面は、須川によって侵蝕されて段丘状を呈している。

新館遺跡は、これらの小扇状地の一つが丘陵と接する扇側部に位置し、南西から北東部にかけて標高100m前後の緩やかな傾斜を示す。付近は東側の水田より一段高い果樹園となっており、良質のリンゴやサクランボが植栽されている。なお昭和41～43年頃の米増産施策による開田によって、遺跡周囲がところどころ土栽され一部水田になるなど、往時の地形がだいぶ改変を受けている。

行政区は山辺町に属するが、その北方にある中山町との境界にあたり、土地所有者も山辺町と中山町の両方が交錯している。JR東日本の左沢線羽前金沢駅の南西800mに位置し、遺跡のすぐ東側を付近の水田耕作の大動脈である最上堰が流れている。

## 2 歴史的環境

須川の西岸地域は、北は中山町から南は山形市谷柏に至るまで、白鷹丘陵添いにかけて多くの遺跡が分布しており、とくに古墳時代から平安時代にかけての遺跡が集中している。古墳時代前期の遺跡としては、山形市谷柏、同萩原、同二位田寺裏、同柏倉坊屋敷遺跡などがあり、山辺町大塚にも当該期の集落跡が認められる。坊屋敷遺跡跡からは竪穴住居跡も検出されており、この地域が比較的早くから農耕文化が出現、定着したことが認められる。

さらに丘陵部には、山形市菅沢古墳群や同大之越古墳など5～6世紀頃の古墳が点在しており、新館遺跡のすぐ南西の丘陵上にも日本海岸北限の前方後円墳かと注目をされた山

辺町坊主塚1号墳が存在する。これらの古墳は、平野部に所在する集落跡との関連が想定され、地域の有力族長の出現を可能にした農耕文化の発展が考えられる。

また、須川西岸地域の平野部には、中山町柳沢付近から山形市谷柏まで一連の条里遺構が分布している。とくに山辺南条里遺構からは確実に奈良時代に遡る長地式の条里遺構が道路や水路などとともに明瞭に検出されている。これらの条里遺構と関連して、奈良・平安時代における集落跡も、沖積地に広く分布し、山形市二位田や同下反田、同高橋、同塙辛田遺跡などから竪穴住居跡や掘立柱建物跡がまとまって発見されている。さらに平野部に接した丘陵の山頂部から山麓にかけては、山辺町壇の山古墳群、同坊主塚古墳群などの終末期群集墳があり、律令体制下における条里遺構と集落とを含めた有機的把握が可能な格好の地域となっている。

山辺町には、鎌倉時代以降の中世の遺跡も多い。城館跡としては高幡城、西光山館などが新館遺跡からさほど遠くない所にあり、安国寺裏山遺跡も初現は鎌倉ないし室町時代に遡るものと考えられている。今回発掘調査を実施した新館遺跡は、こうした綿々たる歴史の積み重ねと環境のもとに形づくられたわけである。

-新館遺跡と周辺遺跡一覧表-

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	新館遺跡	平安・中世	21	五日町古墳	古墳	41	高幡城跡	室町
2	川前遺跡	平安	22	長苗代条里	平安	42	蓮台寺遺跡	弥生
3	達磨寺1遺跡	奈良・平安	23	五日町遺跡	〃	43	安国寺裏山遺跡	鎌倉～江戸
4	達磨寺2遺跡	平安	24	愛宕山遺跡	繩文	44	塙田遺跡	平安
5	達磨寺3遺跡	〃	25	大曾根条里	平安	45	山辺北条里	奈良・平安
6	八幡田遺跡	〃	26	高橋遺跡	奈良・平安	46	良実塙	平安
7	渋江遺跡	古墳・奈良	27	下反田遺跡	繩文・平安	47	壇の山古墳群	古墳～奈良
8	春日堂遺跡	古墳	28	榎沢橋ノ内遺跡	室町	48	西光山館遺跡	室町
9	新井田遺跡	平安	29	大塙遺跡	古墳	49	坊主塚古墳群	古墳～奈良
10	天神遺跡	〃	30	志戸田遺跡	繩文	50	庚申山遺跡	弥生
11	中野遺跡	古墳	31	向原遺跡	〃	51	前田遺跡	平安
12	中野城遺跡	室町	32	原遺跡	〃	52	柳沢条里	〃
13	服部遺跡	平安	33	普光寺境内經塙	中世	53	御嶽神社遺跡	繩文
14	見崎遺跡	平安	34	普光寺経塙	平安	54	墓戸遺跡	〃
15	今塙遺跡	弥生・古墳	35	根際の場遺跡	繩文	55	滝1遺跡	旧石器
16	鶴遺跡	古墳	36	山辺南条里	奈良・平安	56	滝2遺跡	平安
17	陣馬遺跡	〃	37	一本杉遺跡	古墳・奈良	57	滝3遺跡	〃
18	江俣遺跡	弥生～平安	38	手去呂古墳群	古墳	58	長崎館遺跡	室町
19	塙田遺跡	弥生～平安	39	山野辺城跡	江戸			「山形県遺跡地図」
20	飯塙遺跡	古墳	40	諏訪原遺跡	平安・中世			山形県教育委員会 1978年

## II 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

山辺町には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」(1978年)には50ヶ所の先史から歴史時代の遺跡が登載され、とくに須川の西岸、白鷹丘陵地帯と丘陵に流下する小河川に開拓された小規模扇状地にはさまれた、丘陵と平地の変換線上に遺跡が最も多く位置している。昭和48年度からは、山形市の西部地区から山辺町南部に至る一帯に、県営ほ場整備事業に伴って下反田遺跡や山辺条里跡をはじめとして多くの発掘調査が実施されて、奈良時代から平安時代の集落跡や条里遺構等が発見されている。

今回の調査は、山辺町の北部から中山町までの西部丘陵沿いの小狭な道路網を整備する一環として、県道平塩・山辺線の道路改良事業に新館遺跡が係ることになり、遺跡が破壊する恐れがあるため、山形県教育委員会では昭和61年の10月と12月の二度に亘って遺跡詳細分布調査を実施して、遺跡の内容・規模・性格を明らかにし、弥生時代の土器片や平安時代の須恵器片、柱穴等確認されたが、主に平安時代の集落跡と判明した。これに基づいて山形県教育庁文化課では、山形県土木部道路建設課・山形建設事務所などの関係諸機関と充分に協議や調整を行った結果、緊急発掘調査を実施することにした。調査は山辺町教育委員会の協力を得て、昭和62年8月24日から10月27日まで、山形県土木部道路建設課の委託を受けて山形県埋蔵文化財緊急調査団によって記録保存を図り、地元の山辺町大寺地区や大塚地区の方々の作業協力により、緊急発掘調査を実施したものである。

### 2 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和62年8月24日(月)から10月27日(火)まで延31日に亘って実施された。調査経過の概要是、道路改良事業に係る遺跡の面積約1920m<sup>2</sup>のうち最も遺構や遺物が密集する調査地区835m<sup>2</sup>について対象となり、第一段階から第四段階に分けて作業を順次進めた。なお詳細については、新館遺跡発掘調査行程表を参照のこと。

第一段階 8月24日(月)～9月22日(火) 延6日間 粗掘作業

8月24日は調査区南側の未買収地区を地主ならびに山形建設事務所立会のもと粗掘調査を実施、遺構や遺物が発見されない。9月16日からはプレハブ設営・資材の搬入や草刈り作業、グリッドの設定を行い本格的な調査を開始する。グリッドを基準に3×6mを単位とするトレンチをX軸20列南北・Y軸20・25・30・35・40・45列東西方向に井桁状に設定して、調査区の北側より粗掘作業を始め、9月23日に終了する。拡張区を設定する。

第二段階 9月24日(木)～10月2日(金) 延7日間 拡張・面整作業

拡張作業は9月24日から9月29日まで重機械(バックホー)による。並行して拡張済したい9月25日から10月2日まで面整作業を実施して遺構の確認と発見作業を北側より行う。さらにこの間3×3mを一単位とするグリッド杭を設定する。

第三段階 10月5日(月)～10月24日(土)延16日間 遺構精査・検出作業

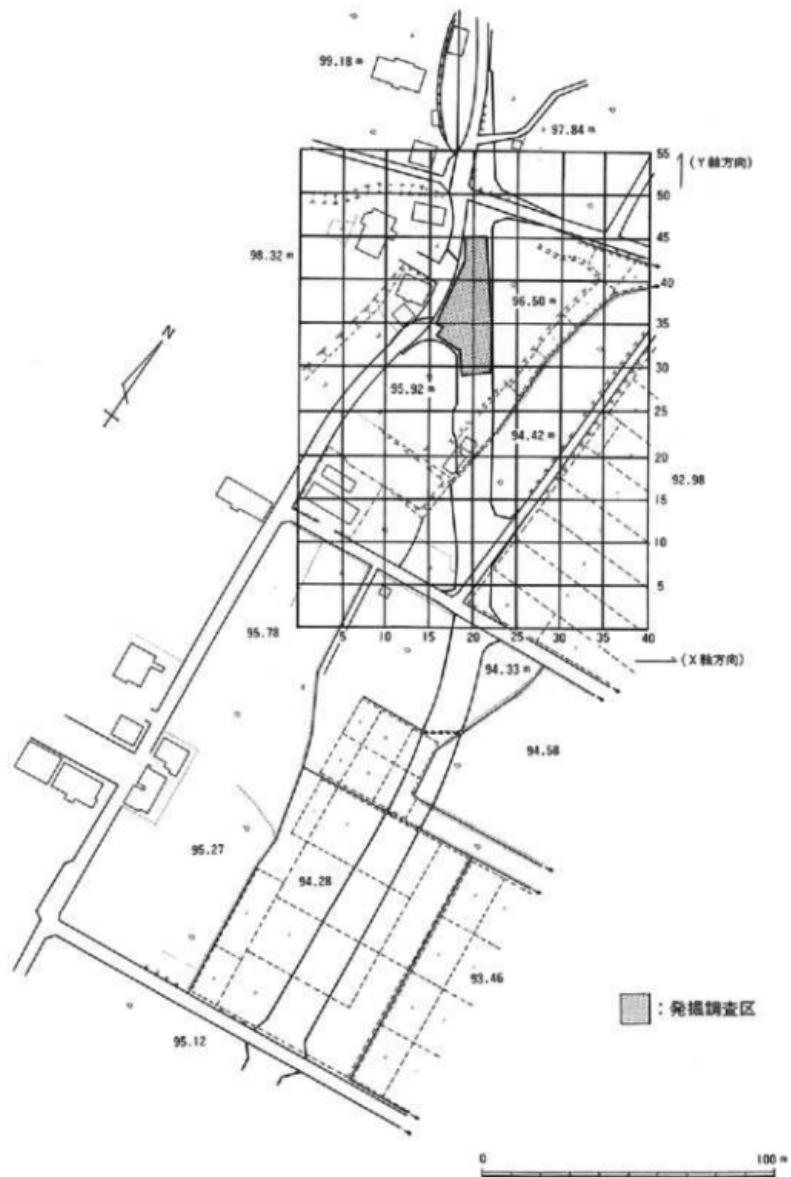
豊穴住居跡・建物跡をはじめとする遺構の精査と検出し、調査区の北側SX1・SD2・SK3・4から始めて、ST10・SB15・16・SK27に至るまで実施して、この間土層セクション・写真などの細部に亘って記録を行う。10月24日(土)現地説明会を開催する。

第四段階 10月26日(月)・27日(火)延2日間 全体平面実測・写真撮影作業

前週より平面実測を行う。27日資料を搬出して現場作業を終了する。

—新館遺跡発掘調査工程表—

調査内容	月・日	8月		9月		10月			月	
		24日	16～18日	21～25日	28～2日	5～9日	12～16日	19～24日	26～27日	
準備	資材準備外 調査区設定	---	■(撤入・草刈作業) ■(3×3トレンチ状)		■(重機使用後3×3単位)				(撤収)■	
相 場 重 機 使 用		■	■	■(精査区域の確認) ■	■(検査区域の拡張)				(10月24日現地説明会 参加者100名)	
検 出	確認面整 理 精 査 検 出	→→→	→→→■	■	■(豊穴住居跡・建物跡・土坑外) (# # # # #)					
遺 構 精 査	豊穴住居跡 建 物 跡 土 坑 溝 柱 穴 群 遺 物 取 上					■(ST1) ■(SB15・16柱穴・溝跡) ■(SB18) ■(SK1・SK2・3) ■(SD6・8・29等) ■(SD2・5) ■(北・中央部柱穴群) ■(SB15植物溝跡)	■(SB17) ■(SK7・11・30) ■(SK12・13・27等) ■(中央・南部柱穴群)			
実 測	簡易道方設定 平面実測 土層断面 レベル測定			■(粗査地区)	■(SD6上面)■	■(SD11:100全体図) ■(遺跡全体断面)	(調査区全体)■ ■(各遺構断面) ■(遺構全体)■			
写 真	全体写真 細部写真	■	■(遺跡遠景・近景外) ■		■(遺構確認状況) (各遺構全量・層序・遺物出土状況外)		(調査区全体外)■ ■			



第2図 遺跡全体図

### III 遺跡の概観

#### 1 調査の方法

今回の緊急発掘調査は、新館遺跡の北西部地区にあたると推定される道路改良事業に係る道路幅約12m・長さ160mで、発掘対象面積が約1920m<sup>2</sup>のうち835m<sup>2</sup>について、とくに遺構や遺物が密集する区域を重点に発掘調査を進めた。

発掘調査は、事業区域内にグリッド基線を道路中心杭に基点を設け20-40グリッドとして、グリッド基線のY軸方向(南北軸)をN-12.20°-Wを計り、3×3mを一単位とするグリッドを設定し、X軸方向は西より1・2……25、Y軸方向は南方より1・2……30と呼称し、調査区は15~22-29~45グリッドの範囲で拡張された。また高低測定の基準杭は標高97.00mを22-41グリッド内に設けてレベル測定値を計った。

調査は、遺跡の北部端よりから3×6mを単位とするトレンチ法を併用して粗掘作業を開始し、調査対象地区的北側から中央部寄りにかけての835m<sup>2</sup>について大きく拡張し、拡張区を設定して調査を実施した。(第2図)

調査の進行状況は、第一段階で井桁状にトレンチをいれ遺構・遺物の密集地を確認する粗掘作業を、第二段階は確認した密集地を拡張し平面精査による遺構の確認を行う。第三段階は確認された遺構の精査・検出作業を、第四段階で遺構や遺物全体の記録を中心とする作業である。

#### 2 遺跡の層序

本遺跡は、小河川に開拓された小扇状地と丘陵西端部の変換点に立地し、全体として西北側が高く、東・南側で低くなり傾斜している。調査区の東側では、果樹畠や水田開墾の際に大半が削平されて0.7~1.2mの段差がついている。地目の現状は、果樹畠・畑地・水田・宅地となっている。今回の調査地区では、20-45グリッド付近が高く、20-40グリッドから20-43グリッド付近まで緩傾地で、20-35グリッド付近でやや平坦部が認められ、それより南側からは急傾斜地で、20-20グリッドからは平地となっている。

基本的な遺跡の層序は、次の5層に大別される。(第4図)

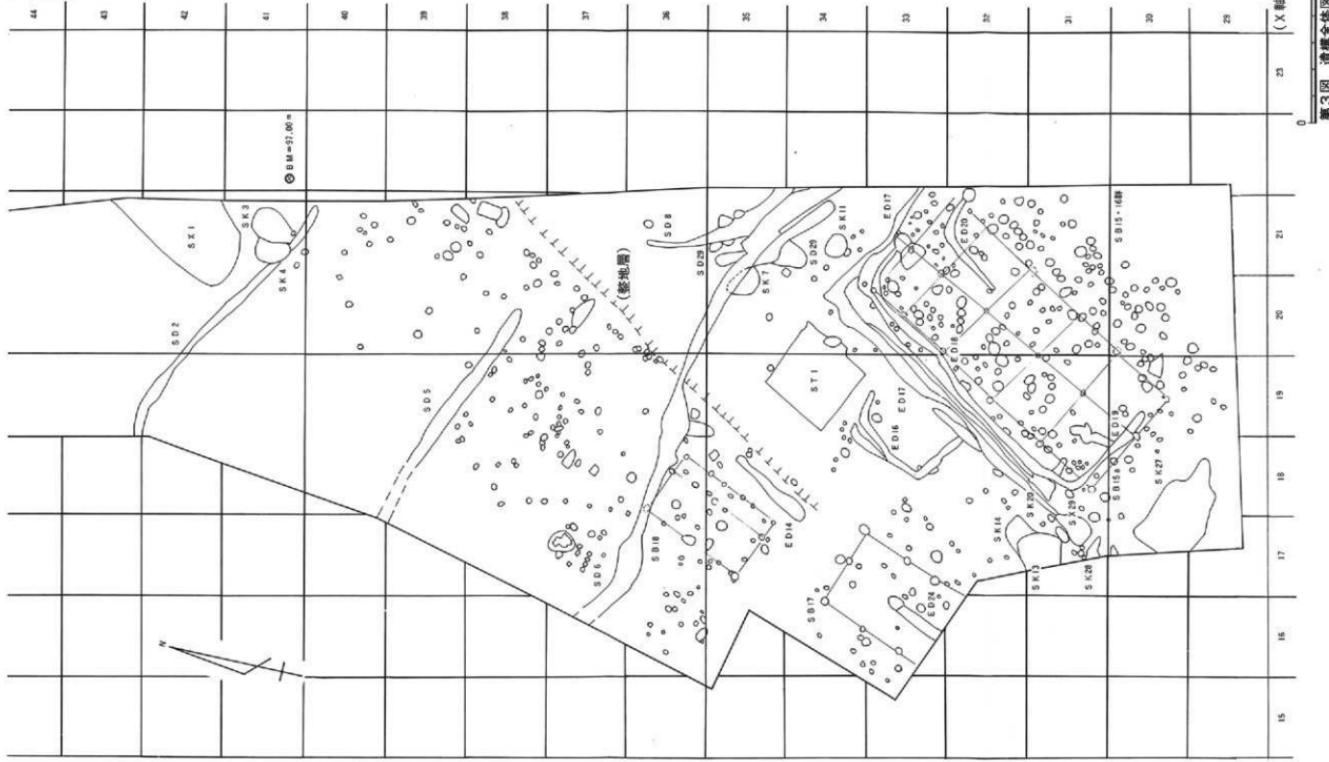
I層 黒褐色土 畑地・果樹畠による耕作土(表土)。厚さ8~51cmである。

II層 暗褐色土 微砂質土、炭化・白色風化微粒子を多量に含む。厚さは12~43cmである。

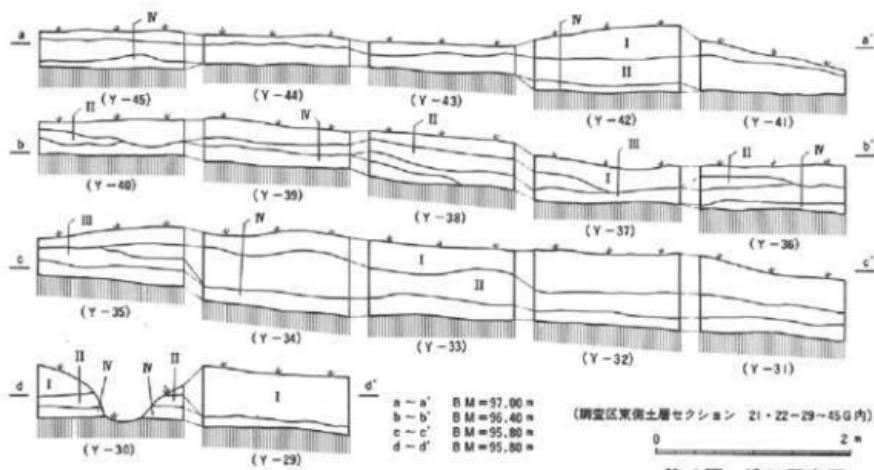
III層 褐灰色土 微砂質粘土、多量の粘土ブロック・風化礫大粒を含み堅くしまっている。

調査地の中央部の東側にかけては12~24cmの厚さで堆積している。人為的にほぼ堆積しているため、遺構を構築する際の整地層である。

(Y 軸方向)



第3図 造構全体図



第4図 遺跡層序図

IV層黒色土 粘質微砂土、V層の漸位層である。上面にはIII層の風化礫粒や粘土ブロックが混じる。厚さ9~14cmである。遺構の確認面である。

V層橙色土 粘質土、地山である。風化礫ブロック状を多量に含む。

### 3 遺跡の分布

本遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡1・掘立柱建物跡6(倉庫1)・土坑8・溝跡16(うち建物跡に伴う小溝9)・柱穴576・不明遺構4である。(第3図 図版2・4)

調査北側は、SD5を境としてSX1、SD2・SK3・4、小柱穴群は中央から東側グリット壁寄りに在り、ほぼ平坦地に位置している。小柱穴群は不規則に在り建物跡などの存在は認められない。調査区中央部は、西側で緩傾斜地で東側では整地層が認められ取り除くと地山は急傾地となっている。中央から西側にかけて柱穴群が散在しているが、不規則的である。SD6は中央部にあり、やや蛇行しながら東西方向に走り、東側ではSD8・29やSK7・30とそれぞれ重複し、南側でSK11と隣接している。SB17は調査区の南側にあり小柱穴や小溝と近接して在る。SB18は、SD6西側の南側に在り柱穴が重複し、その外不規則な柱穴群が偏在している。SB18から17にかけては、北から南にかけて傾斜地となっている。調査区南東側は、ST10・SB15・16を中心とする竪穴住居・建物跡の柱穴群や小溝が南北あるいは東西方向に規則的に配置され、SK12~14・SK27等の遺構が南側に接している。SX27付近からは地山が急激に落ち込み泥炭質の土層が堆積している。

## IV 遺構と遺物

### 1 検出遺構

#### a 穴住居跡

##### 10号住居跡（第10図 図版5）

調査区の中央部の東南寄りの傾斜地に在り、19・20-34・35内に位置している。東側でS B15・16の溝跡や柱穴と近接し、西側でS B18と隣接している。遺存状態は、確認面上部に果樹の木や後世の排水溝によって大部が攪乱され良くない。とくに東辺壁は攪乱によって立ち上りを検出できなかった。確認面はIV層上部で、住居跡の構築はIV層を掘り込み床面柱穴の底面を構成している。

平面形は、西辺と南辺がやや脛らみ隅丸になる正方形を呈している。大きさは長軸・短軸とも2.95~2.96mを計り、確認面から床面までの深さは8~13cmである。壁の状態は、緩やかに掘り込まれ、北隅付近の壁体では凹凸が認められる。床面は、北辺壁から中央部にかけてとE L13周辺部で若干の凹凸がみられ堅く踏みしめられている。その外は平坦でやや軟弱であり、E P 2付近ではとくに軟らかい。柱穴は12本検出され、E P 1・2が支柱穴で床面からの深さは21~24cmである。支柱穴はE P 3~12で、北辺壁と南辺壁にそれぞれ5本検出され、対応しているのが特徴的である。床面からの深さは8~22cmである。周溝は検出されない。

カマド跡(E L13)は、住居跡の東辺中央部に位置し、長軸はほぼ東西方向でN-82°-Eを計る。大部分は底面まで攪乱を受けて上部の構造が不明で、底面近くの両袖部が遺存しているのみであるが、精査・観察の結果わずかながら袖部周辺に白色粘土ブロックが散在していることから、恐らく粘土を使用して構築したとみられる。焚口部は、床面から4cm掘り込まれ、煙道の先端まで焼土層が堆積しているが、底面はそれほど焼けてはいない。

出土遺物は、覆土中から石器の剝片・碎片が3点、須恵器壺小片1点が出土しているのみである。出土した土器片からは特定した時代は不明であるが住居跡の形態および外のSD21から出土した須恵器などを考慮すると、時代は平安時代の前半9世紀代である。

#### b 掘立柱建物跡

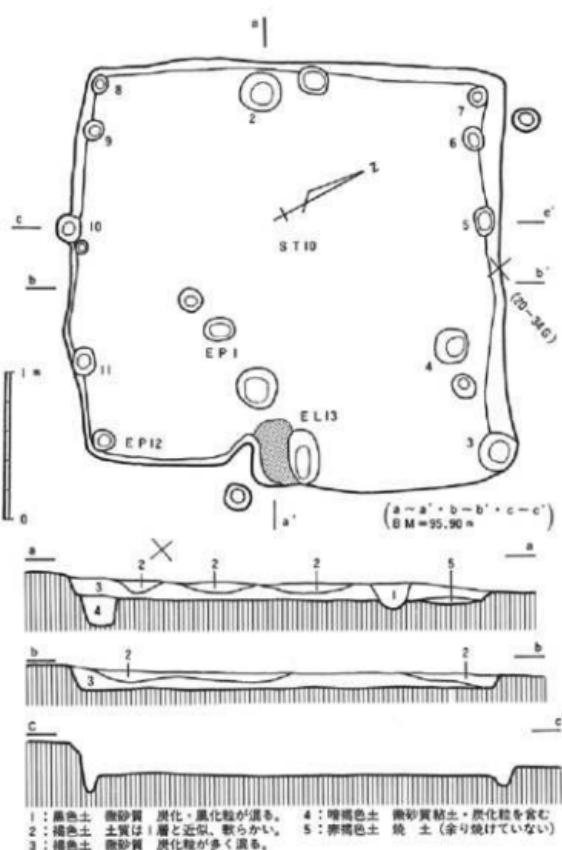
##### 15・16号建物跡（第6図 図版6~8）

調査区の中央部南寄りから南側の傾斜地に在り、18~22-30~34グリッド内に位置している。北側でSK11・北西側でST10・南東側でSK12~14とそれぞれ隣接あるいは近接

している。遺存状態は建物中央で後世の排水溝で若干削平されている外はほぼ良好である。確認面は、建物跡の東側から南側にかけてはIV層上面で、中央から西側ではV層上面でそれぞれ確認し、柱穴や溝跡はV層中まで掘り込み底面としている。15号建物跡については、柱間や柱穴の覆土からみて3棟存在することが判明したため、呼称を15a・b・c号建物跡とした。

#### 15a号建物跡

建物跡群の中央部に位置し、西側でE D17～19と平行に接している。桁行5間で11.16m・梁行2間4.52mで長軸方向がN-30°-Eを計り、南北棟の掘



第5図 10号住居跡

立柱建物跡である。柱穴は17～2.53mで、梁行では2.18～2.24mとなる。明確に掘方をもつ柱穴は、E P 4・2・12～15で平面形が隅丸方形や円形を呈し、径24～52cmで確認面からの深さは42～53cmである。柱の当りは方形になり一辺14～19cmで、覆土は暗褐色土や炭化粒が混る黒色微砂質土で、回りは黒褐色粘質微土と橙色粘土ブロックが互層に堆積している。外の柱穴は、径25～28cm・深さ39～51cmで不整の隅丸や円形を呈し、覆土は橙色粘土粒や小ブロックが混る黒褐色粘質微砂土である。

本建物跡に伴う雨落溝(E D18)は、柱穴群の西側に在り、北辺と西辺の柱穴列とほぼ平

行に走り、西辺柱穴 E P 5・6 の中間付近でとまり、北西隅で大きく膨らみや小蛇行を示すが、ほぼ直線的に走っている。大きさは幅18~53cm・確認面からの深さは8~11cmである。覆土は、粘土小粒子や炭化粒子が若干混る黒色微砂質土である。その外、ED17はED18の西側に沿うように走り、北側では不定形になっているがほぼ直線的である。大きさは幅16~68cm・深さ5~9cmである。覆土は、暗褐色粘土ブロックが多量に混り堅くしまる黒褐色微砂質土である。雨落溝のED17・18の新旧関係は土層観察でとらえることはできなかったが、柱穴や溝の覆土状態からみてED17よりED18が新しいと考えられる。

以上のように、SB15aは柱穴の検出状況や二本の雨落溝状態からみて、それほど時間差がなく、建替などがあったと推定される。時代はEP8の覆土から珠洲系陶器片が出土していることから、14世紀代前後の鎌倉時代末期に相当する時代である。

### 15b号建物跡

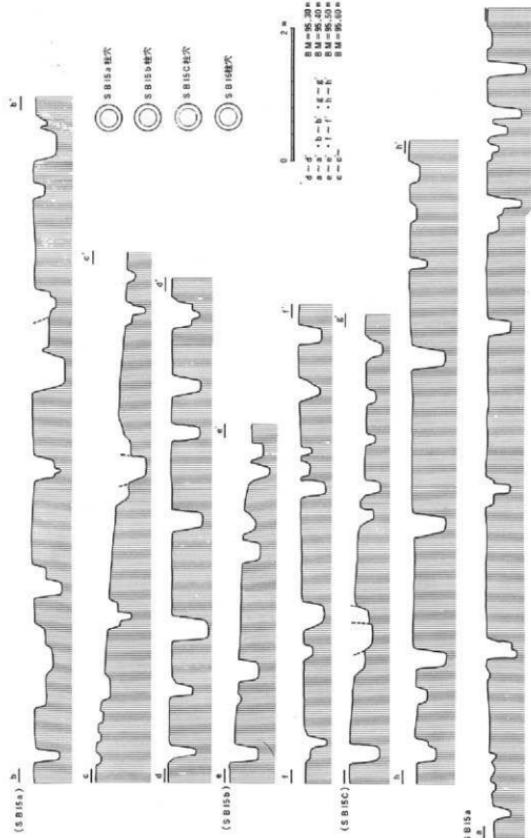
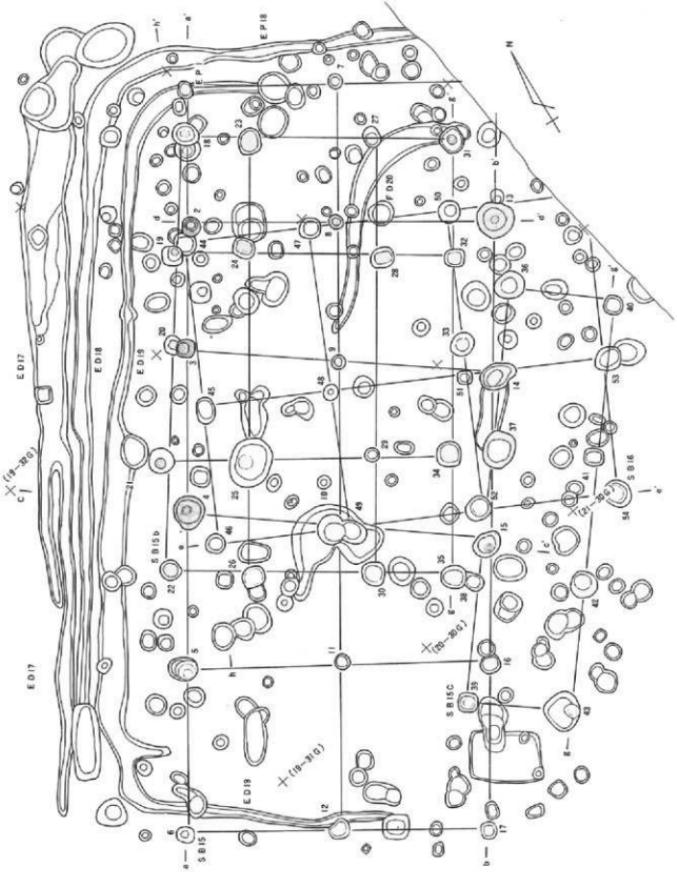
建物跡群の中央部、SB15aとほぼ重なるように位置している。桁行4間で6.52m・梁行3間で4.32mで長軸方向N-28°-Eを計り、南北棟の掘立柱建物跡である。柱穴18本が検出され、柱間が桁行で1.82~1.87mと1.54~1.60mで、梁行は北辺・南辺ともEP26とEP22・EP30とEP35では1.26m、EP26とEP30では1.81~1.86mでみられるような柱間である。明確に掘方をもつ柱穴は、EP31で平面形がやや隅丸方形になり、径42cm・深さ48cmで柱の当りは隅丸方形で一辺18cmで深さ48cmである。覆土は橙色粒子や炭化物が多量含む黒褐色土で、回りは粘土ブロック・粒子と暗褐色土微砂質土が互層に堆積する。外の柱穴EP23~30・32~35は明瞭に掘り方や柱当は確認されない。覆土は、上層に炭化粒子や粘土粒が混る黒褐色微砂質土で下層では炭化粒を含む黒色微砂質土である。

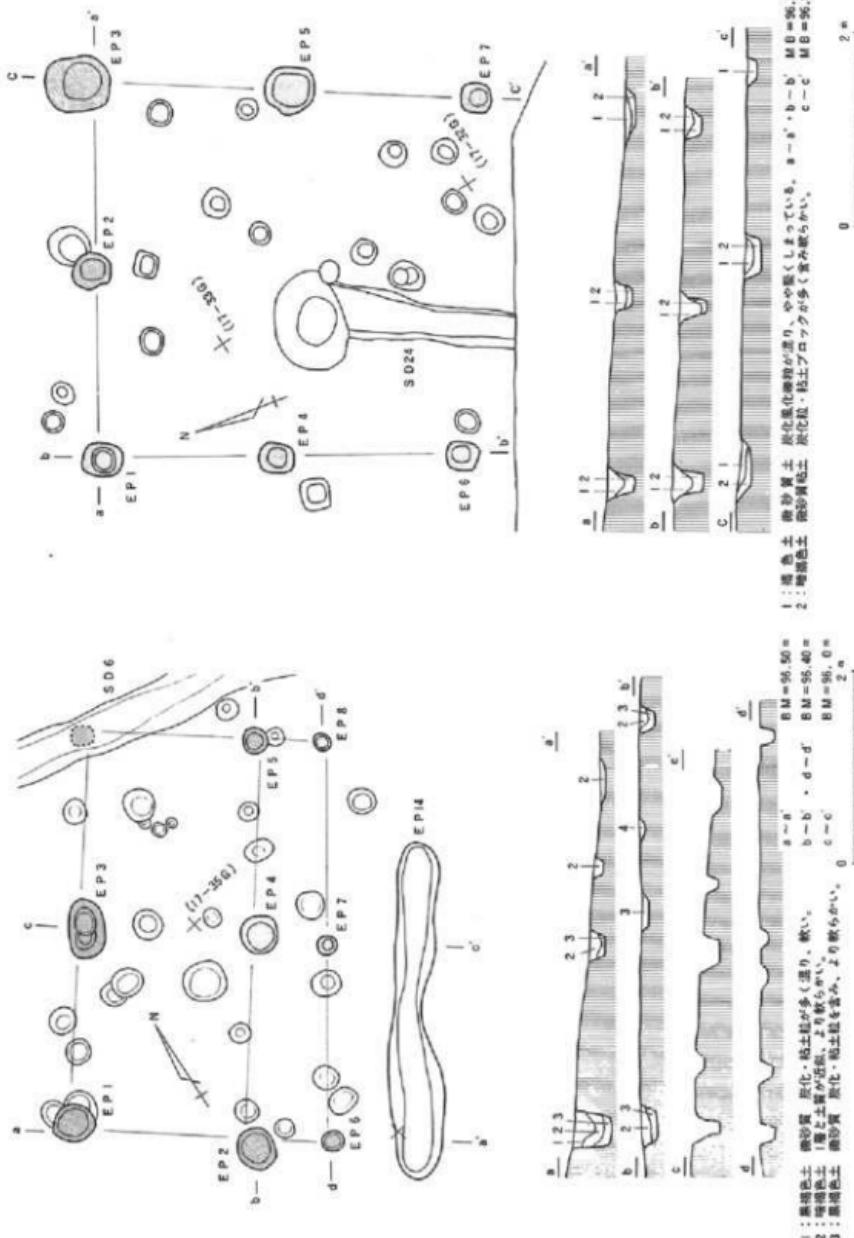
雨落溝(ED19)は、柱穴列の北辺西隅から西辺を通り、SB15a南辺柱穴列まで至り、北側から西側の中央までは幅が狭く、西側中央から南側まで幅広で、南辺でまた狭くなる。大きさは幅が16~42cm・深さ8~10cmである。覆土は、橙色粘土ブロックや砂礫粒が混る暗褐色微砂質土で堅く踏みしめられており、恐らく人工的に埋めたとみられる。ED17~19の新旧関係では最も古く、本建物跡に伴う溝である。

本建物跡の時期は、建物跡北西隅にあるSB15aのEP1とSD19の重複関係からSB15bより古く、また柱穴内より遺物の出土がないが、恐らくSB15の時代と同様に鎌倉時代の後半と考えられる。さらに、柱穴列南辺のEP22・26・30・35より南側ではSB15bに伴う柱穴が明確にされなかったが、ED19の状態からもう一間増えて5間×4間となる可能性がある。

### 15c号建物跡

建物跡群の東側寄りに位置している。桁行3間で6.24m・梁行1間で1.56mで長軸方向





第7図 17号建物跡

第8図 18号建物跡

N-36°-Eを計り、南北棟の掘建柱建物跡である。柱穴は18本検出され、E P 36~43である。柱間が桁行1.82~2.26mで、梁行1.58~1.62mとなる。柱穴の覆土は、黒褐色粘土や橙色粘土ブロックさらに砂礫が多量に入り混る褐色土であり、柱を抜き取った後人工的に埋め戻した土層である。平面形は隅丸方形や円形を呈し、径26~62cm・確認面からの深さは32~35cmである。

時代は、S B 15 a・bの柱穴掘込み状態や南北棟に建つ類似性からみて14世紀前後の鎌倉時代後半に相当すると考えられる。S B 15 a・b・cの新旧関係は、S B 15 cの柱穴覆土の状態から本建物跡はS B 15 a・bよりも古くなる。

#### 16号建物跡（倉庫跡）

建物跡群の中央の北寄りに位置し、北東隅の柱穴は調査区外で確認できない。柱穴は11本検出され、E P 44~54である。桁行3間6.02m・梁行2間4.52mで長軸方向N-60°-Wを計り、東西棟の建物跡である。柱間は桁行1.96~2.11mで、桁行は1.98~2.38mとなる。柱穴は掘り方を持たず、平面形が円形や隅丸方形を呈し、径24~38cm・深さ48~50cmである。柱穴の覆土は、上層で炭化粒子や風化礫粒が混る暗褐色微砂質粘土、下層では炭化粒子や橙色土粒子を含む褐色粘質土であり全体に軟らかくややレンズ状に堆積している。この覆土層はS T 1やS B 17の土質などに近似している。

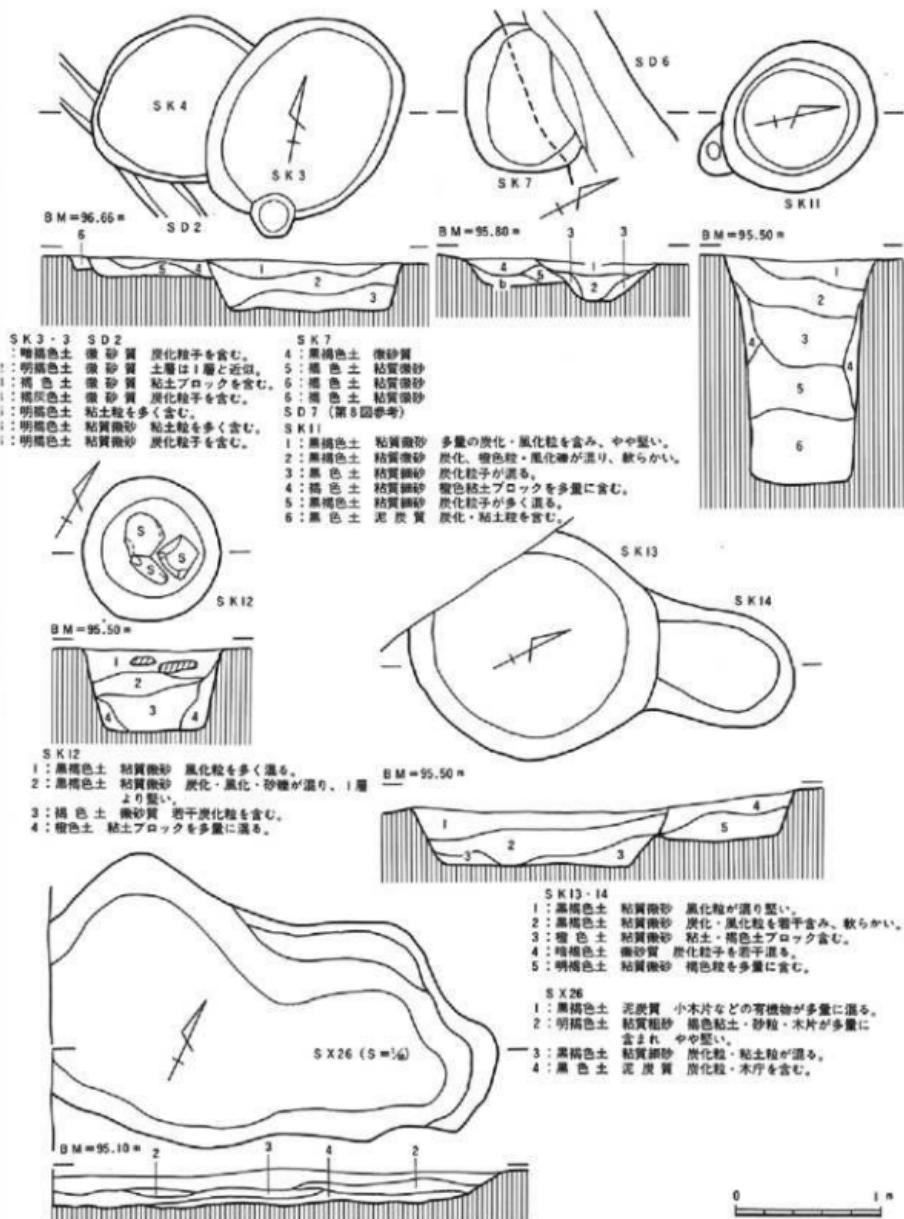
時代は、柱穴の中から遺物が出土していないため、時代を判定することは難しいが、柱穴の覆土層がS T 1やS B 17に近似することから、平安時代の前半9世紀代に相当すると考えられる。

#### 17号建物跡（第7図 図版8）

調査区の南西側の緩傾斜地、15~17-31~33グリッド内に位置し、南側は調査区外で柱穴などの確認は出来なかった。柱は7本検出され、桁行は不明であるが2間は検出されている。梁行は2間で3.92mで、長軸方向を南北棟と考えればN-20°-Eを計る掘方を持たない建物跡である。柱間は桁行方向で1.86~1.92m、梁行で1.92~2.02mである。時代は、S T 1・S B 16の覆土層に近似することから、平安時代の前半9世紀代に相当する。

#### 18号建物跡（第8図 図版9）

調査区の中央部の西側の傾斜地、16~18-33~35グリッドに位置し、北西隅の柱穴はS D 9により切られて現存せず。柱穴は8本検出され、桁行2間で4m・梁行1間で1.96mで、長軸方向N-33°-Eを計り、南北棟の庇付の掘立建物跡である。柱間は桁行1.98~2.22m、梁行1.96mで、E P 6~8は1.98~2.06mである。E P 3は掘方が明瞭で、柱の当り



第9図 土坑群

は、方形になり 1 辻 18cm で、覆土は暗褐色土粒子や炭化粒子が多量に混る黒色微砂質土で、回りは黒褐色粘質土と橙色粘土ブロックが堆積している。外の柱穴の掘方は不明瞭の部分が多い。建物跡の東側には雨落溝(E D14)が南北に走り、幅 21~42cm・深さ 6~8cm である。時代は、覆土層から考慮して鎌倉時代後半の 14世紀前後に相当する。

### c 土坑 (第9図 図版3・4・9)

3・4号土坑 20-40グリッドに在り、SD 2 と重複している。SK 3 は、平面形が梢円形になり、長径 1.98m・短径 1.29m で深さ 33cm で、緩やかに掘り込まれ底面はやや起伏がある。SK 4 は不整円形を示し、長径 1.20m・短径は不明で深さ 12cm で、底面は平坦である。SK 3 より須恵器 1 点出土。SK 3・4 とも覆土層や遺物から平安時代前半である。

7号土坑 20-34グリッドに在り、SD 6 と重複し SK 7 が古い。平面形は梢円形で、長径 1m で短径不明・深 20cm で、緩やかに掘り込まれ底面は平坦である。時期は不明である。

11号土坑 21-34グリッドに在り、平面形は円形を呈し、径 1.10m・深さ 152cm で、ほぼ垂直に掘り込まれ底面はやや超伏がある。覆土の 6 層より須恵器の壺破片が出土する。形態からみて掘抜きの井戸跡で、時代は出土遺物から平安時代前半の 9世紀代である。

12号土坑 17-31グリッドに在り、円形を示し 径 1m・深さ 51cm で、ほぼ垂直に掘り込まれ底面は若干起伏がある。覆土 1 層には偏平な河原石 3 個が流れ込んでいる。出土遺物はない。時期は不明である。

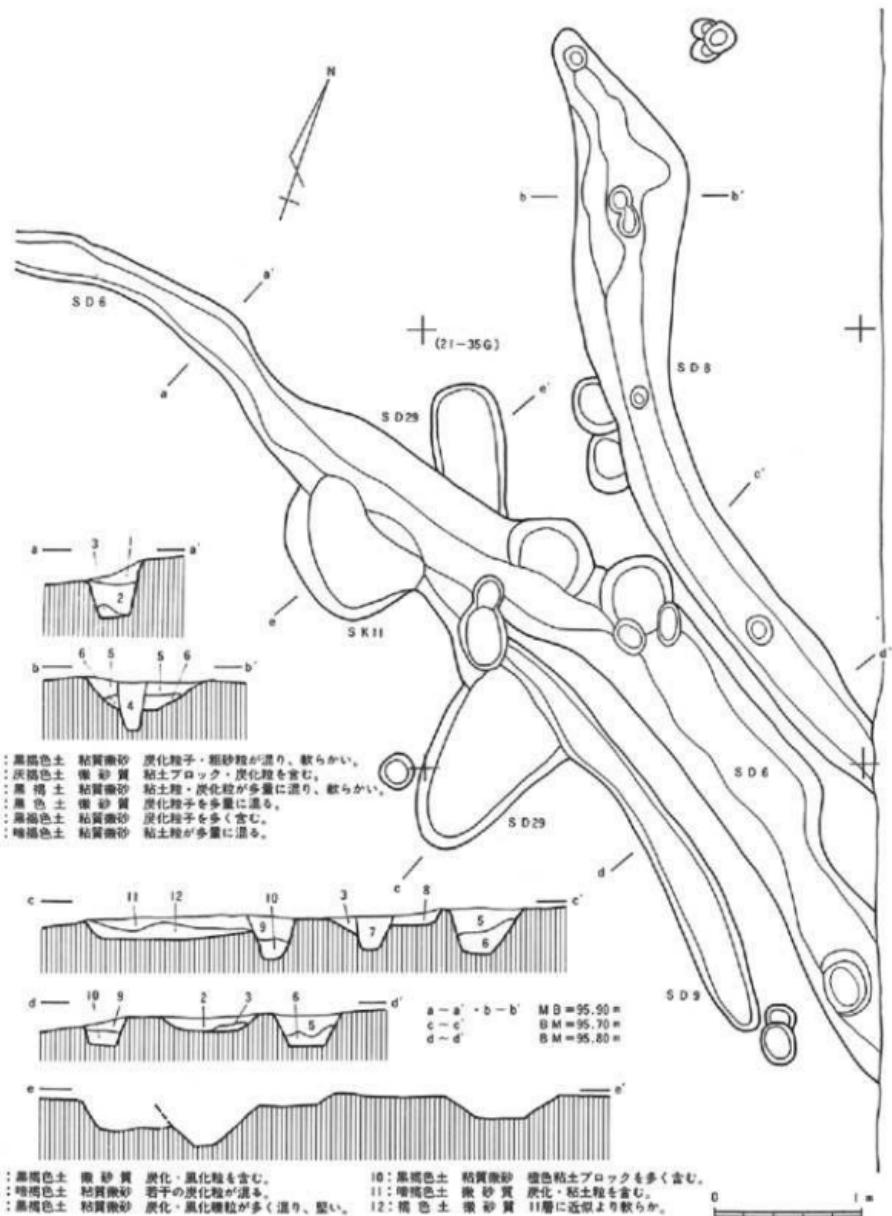
13・14号土坑 17-30・31グリッドに在る。SK 13 は不整円形になり、径 1.66m・深さ 39cm で、緩やかに掘り込まれ底面は起伏に富む。SK 14 は梢円形で、長径不明・短径 80cm で深さ 30cm、ほぼ垂直に掘り込まれ底面は平坦である。SK 13 が新しく時期は不明である。

27号不明遺構 17・18-29・30グリッドに在る。平面形は不整形で大きさは  $3.20 \times 1.70$  m で、上面から底面まで起伏に富んで掘り込まれている。覆土は砂層や泥炭に小木片が多量に混っている。出土遺物はなく時期は特定されないが土層観察で鎌倉時代後半である。

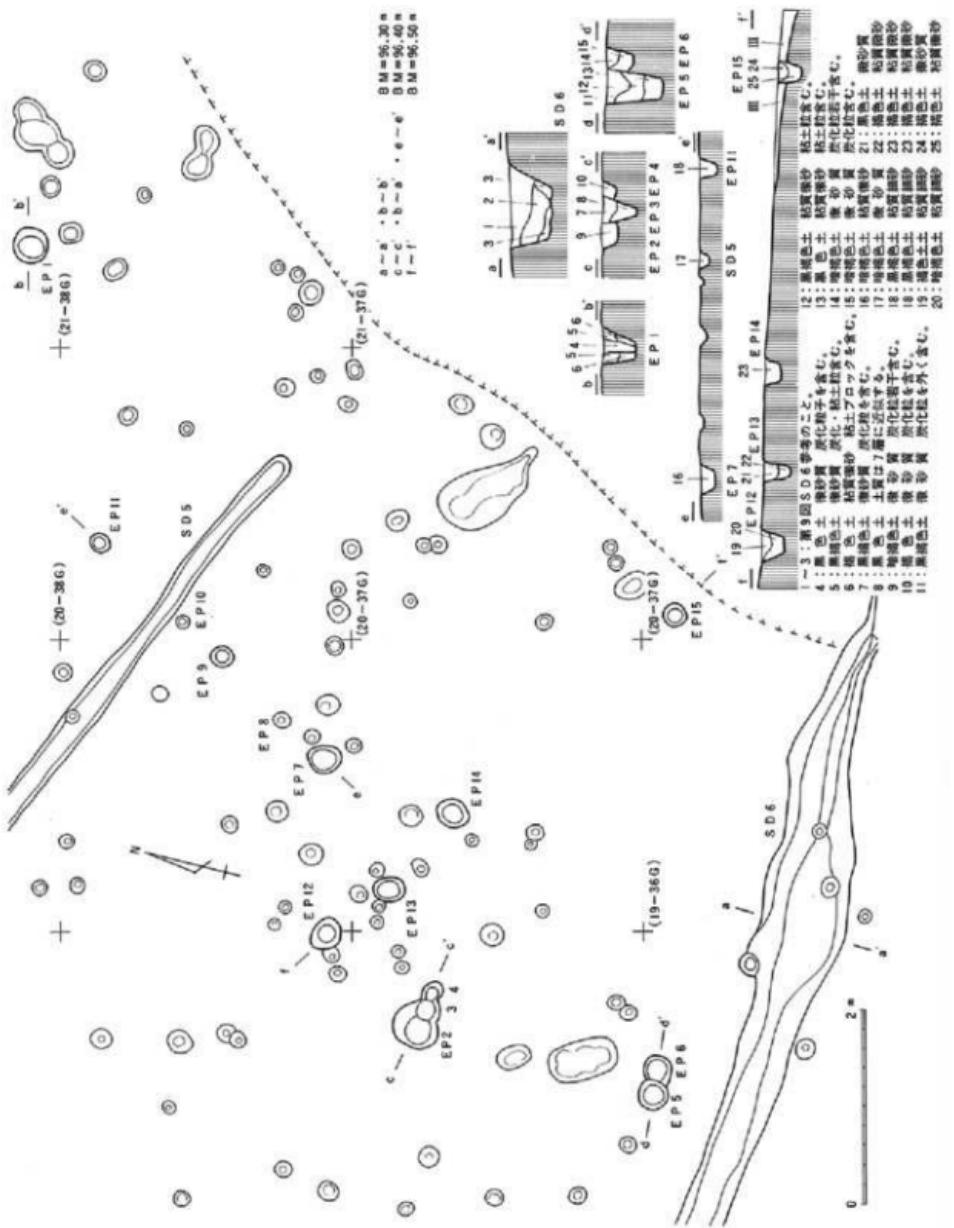
### d 遺跡・柱穴群 (第10・11図 図版 2~4)

溝跡 5 本検出する。SD 2・5・6・8 はほぼ東西方向に延び、SD 6 は幅 31~89cm・深さ 11~57cm で、V 層をほぼ垂直に掘り込み下部では V 字状になり、底面は起伏があり中央で狭くなる。SD 8 も SD 6 同様の形態である。SD 2・5 は幅が狭く直線延び、幅 22~30cm・深さ 10cm 前後である。SD 21 は、コ字状になり、幅 22~32cm・深 20cm である。

柱穴群 建物跡群の柱穴を除くと 576 本検出され、径 8~29cm・深さ 5~27cm で円形や梢円形を示し、調査区の中央部に集中するが、建物跡などを構成するには不充分である。



第10図 溝跡



## 2 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は接合後で38点ときわめて少なかった。その内訳は縄文もしくは弥生時代のものと考えられる石器片が3点、平安時代の土器片が21点、時期不明の土器片が1点、中世陶器片が11点、近世陶磁片が2点となっている。以下、時代ごとに説明を行う。

### 縄文・弥生時代（図版12）

剝片が2点、碎片が1点いずれも平安ないしは中世と考えられる遺構の堆積土から出土している。E D 18から出土した剝片は長さ45mm、幅39mm、最大厚11mmの幅広の剝片で背面に主要剝離面と同方向の剝離面が1枚、直交する剝離面が1枚観察される。E D 23出土のものは中央部で折損する。自然面打面で背面には主要剝離面とほぼ同方向の剝離面が4条認められる。S T 10出土のものは碎片である。3点とも硬質頁岩製である。

### 平安時代（第12図 図版12）

須恵器片19点、赤焼土器片2点の21点が平安時代の遺物である。このうち14点は遺構外からの出土であるが、遺構内出土のものと同一個体とみられるものが多数を占める。

須恵器は1点の坏片を除いて、他はすべて壺の破片である。しかも、そのほとんどが同一個体と思われ、調整や色調からみて、明らかに別個体とみられるものは1点だけである。坏は小破片のため実測不能であるが、小振りの坏もしくは高台付坏と思われる。S T 10からの出土である。壺は遺構ではS D 21を中心とし、また、遺構外でもS D 21のある18-32区からその大半が出土していることから、本来的にはS D 21内に廃棄されたものと考えることができる。

第12図1は口頸部、2は頸部から体部上半、3・4、それに8は体部上半、5・6は体部中央から下半部にかけての資料で、これらは同一個体である。口径は9~10cmと推定される。頸部直下まで内外面ともロクロ整形となり、その下部は外面に平行タタキ、内面にも平行アテが認められる。7はS K 11から出土した別個体の壺の体部上半の資料でロクロ整形後にタタキが施されている。

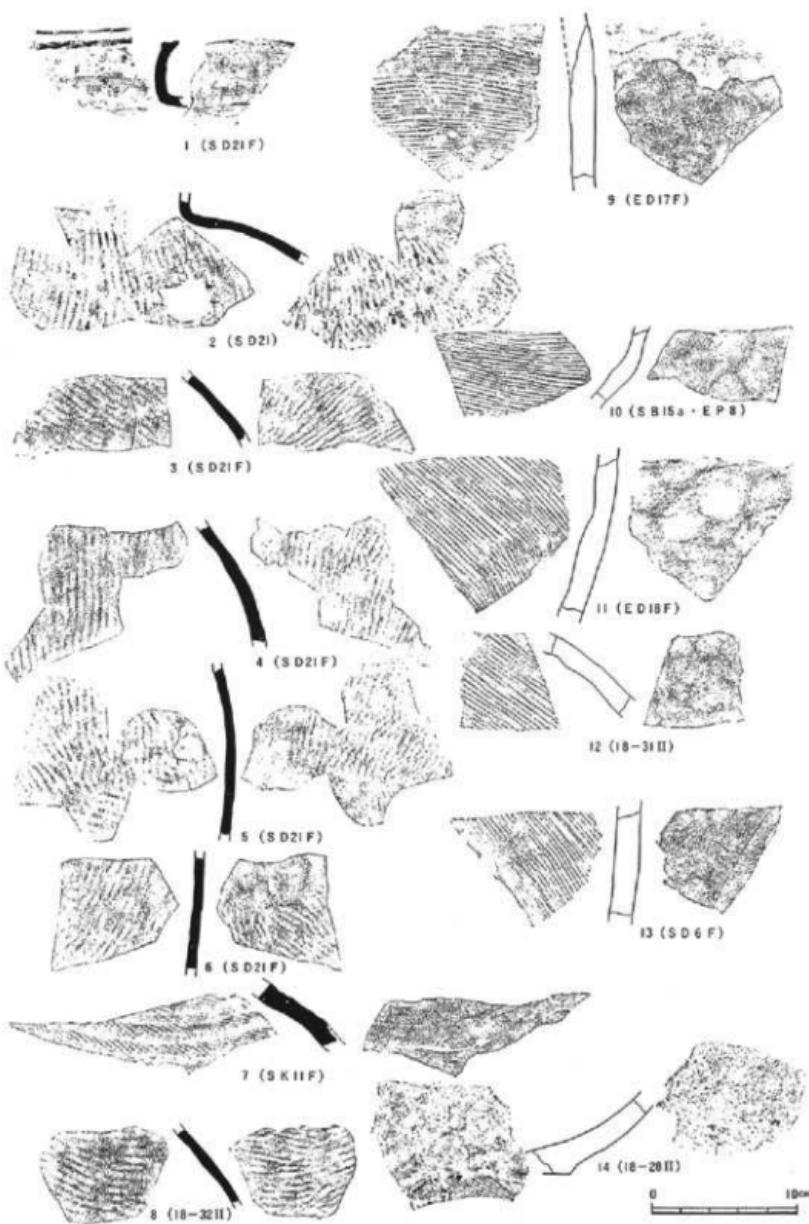
赤焼土器片はS D 6と遺構外から各1点出土している。いずれも坏の小破片である。

### 中世（第12図 図版12）

壺もしくは壺T種の破片が11点出土している。S D 6、E D 17、E D 18、E P 8(S B 15 a)の各遺構からの出土がある。9~12は外面に条線状タタキ、内面にアテ痕があるが13にはアテ痕がない。14は壺T種の底部資料と考えられる。

### 近世（図版12）

灰黄色の釉のかかった磁器碗の底部資料と、鉄釉の壺の陶器片1点がある。



第12図 出土遺物拓影図

# V まとめ

今回の発掘調査は、昭和62年県道平塙・山辺線特殊改良一種工事に係る緊急発掘調査として実施した。発掘調査は、昭和62年8月24日から10月27日までの期間に、延31日間におよんでいる。調査の対象地区は、遺跡の北西部で道路改良事業区内に限って調査し、発掘対象面積が約1920m<sup>2</sup>のうち遺構や遺物が密集する地区的面積835m<sup>2</sup>となった。発掘調査の結果、竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡6棟・土坑8・溝跡16条・柱穴576・不明遺構4などの遺構群が検出された。遺物は、須恵器・赤焼土器・珠洲系土器片など中心に整理箱1箱が出土した。

## 1 遺 跡

本遺跡は、山形盆地の西縁・須川の西岸に在り、白鷹丘陵の東縁部の小扇地の一部が丘陵と接する扇側部と平地の変換点に在る。北西部から南東部にかけて標高100m前後の緩やかな傾斜となる。これら丘陵添や小扇状地には古墳時代から平安時代にかけての遺跡も多く、とくに遺跡の南方の山辺南条里・山辺北条里遺跡や北方の柳沢条里遺跡など大規模で広範な条里区画が存在し、丘陵添には条里を結ぶとみられる“俗称山辺の道”と称する古道が果樹畠の中に点在している。新館遺跡から検出された平安時代と鎌倉時代の竪穴住居跡と建物跡群などの規則的な配列から察すると、古代条里制の区画を基盤とする中世莊園制の集落や構造の一端が、今回の調査で若干ながらも伺い知ることができる。

## 2 遺 構

今回の調査で、判明した遺構を分けると平安時代と鎌倉時代の2期に分けられる。

第1期平安時代の前半(9世紀代)

S T10・S B16・17・S K 3・4・11・S D 2・5など、柱穴覆土が平安時代と近似する柱穴が北側にも在る。1期は、調査の全体に亘って広がりをみせ、S T10を中心とする回りに南に建物跡、東に倉庫跡や井戸跡がある。また、III層の整地作業を行っている。

第2期鎌倉時代の後半(14世紀代)

S B15群・18・S D 6など調査区の中央部から南東側に遺構の広がりがある。S B15a・bは柱の掘方や遺構からみて、規模の大きな家屋が存在し、この時期の上層階級の屋敷跡一部と推考できる。S X27は土層観察からみて沼地状に存在したものとみられる。

その他S X 1・22・23の性格・時期などは不明である。

### 3 遺物について

今回の調査で出土した遺物は38点ときわめて少ない。最も多くの破片が認められる平安時代の遺物も大半は同一個体であり、個体数という点から見れば、土器・陶器とも10個体を大きく上回ることはないだろう。そのため、遺物の年代を決定する手掛かりも乏しいが、ここで敢えて述べれば以下のようにまとめられる。

#### (縄文・弥生時代)

剝片・碎片の3点があるが、調査に先行する試掘調査で弥生時代の壺の一部が出土している(山形県教委1987)ことから、これらの石器は弥生時代のものかも知れない。

#### (平安時代)

S K3、SK11、SD21等から出土している須恵器は壺1、甕2~3個体分とみられる。壺は小振りな壺もしくは高台付壺とみられることから8世紀末~9世紀前半頃の所産の可能性が高いが赤焼土器の壺片も出土しており、なお検討の余地がある。

#### (中世)

EP8、ED17、18、SD6等から出土した珠洲系陶器は壺T種の底部と甕もしくは壺の体部破片であるが条線状叩き目の条間が粗いことを根拠として珠洲系の第III~IV期頃、1300年頃を前後する時期と考えたい。

#### (参考・引用文献)

- 柏倉 亮吉 1958 「村山平野の條里制遺跡について」 社会経済史学6-4
- 柏倉 亮吉 1971 「東北地方の条里制遺構」 山形史学研究第7号
- 佐藤庄一外 1976 「大曾根条里遺構」 山形県埋蔵文化財調査報告書第6集
- 阿部明彦外 1979 「山辺条里遺構発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第22集
- 佐藤正俊外 1981 「柏倉遺跡群発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 長沢 正機 1982 「乱馬堂遺跡発掘調査報告書」 新庄市教育委員会報告書6
- 渋谷 孝雄 1982 「境田C遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第62集
- 渋谷孝雄外 1984 「境田C'・D遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集
- 佐藤正俊外 1986 「達磨寺遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 名和達朗外 1987 「分布調査報告書(14)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第110集

# 図 版



遺跡近景 (S↑)



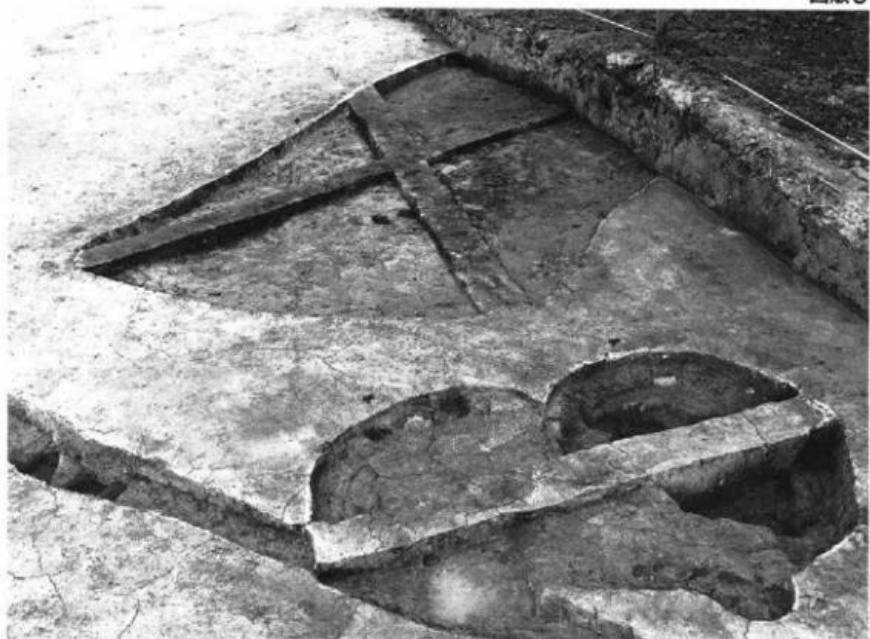
調査区近景 (N↑)



調査区全景 (N↑)



調査区全景 (S↑)



1号不明造構・3・4号土坑 (S↑)



2号溝跡 (N↑)



5号溝跡 (N↑)



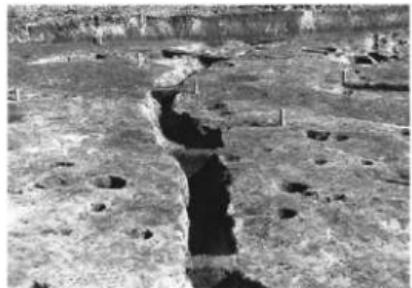
面整理作業 (NE↑)



造構精査作業 (SW↑)



調査区中央部全景 (SW↑)



6号溝跡 (NW↑)



6号溝跡 (E↑)



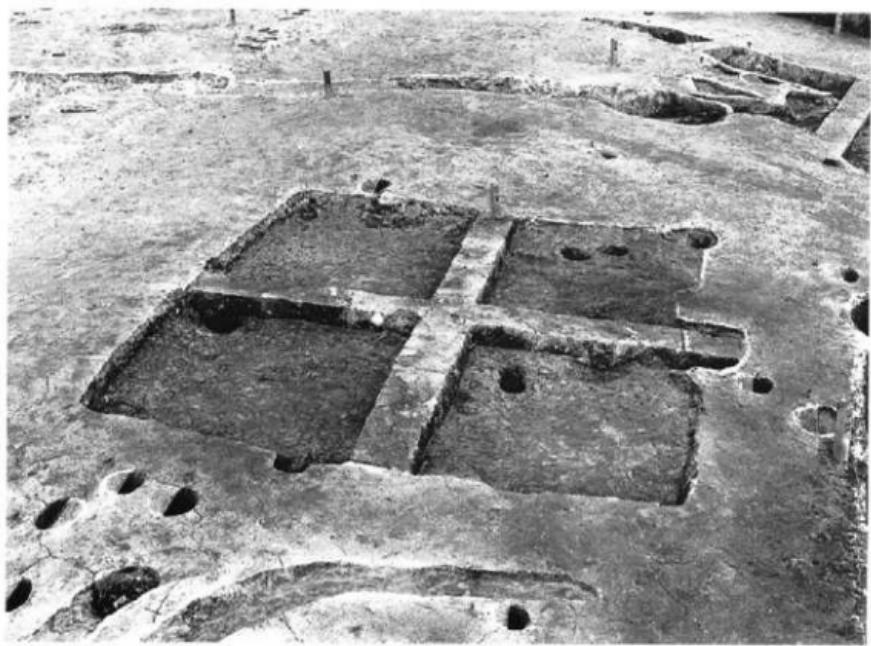
6・8・9号溝跡 (SE↑)



11号土坑 (E↑)



10号住居跡 (W↑)



10号住居跡 (S↑)



15·16号建物跡群 (SW↑)



15·16号建物跡群 (NW↑)



15・16号建物跡群 (SE↑)



15・16号建物跡柱穴群 (NE↑)



15・16号建物跡柱穴群 (SW↑)



15・16号建物跡北側柱穴群 (NE↑)



15・16号建物跡南側柱穴群 (E↑)



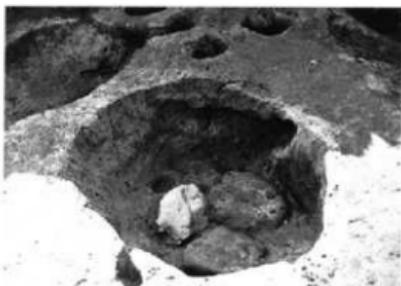
15号建物雨落溝跡 (SW↑)



17号建物跡 (N↑)



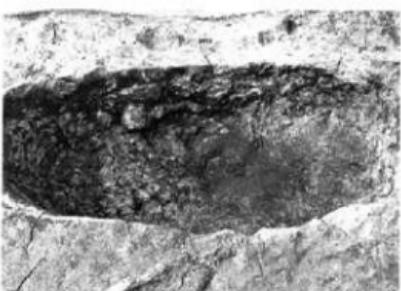
18号建物跡 (S↑)



12号土坑 (N↑)



13・14号土坑 (N↑)



20号土坑 (E↑)



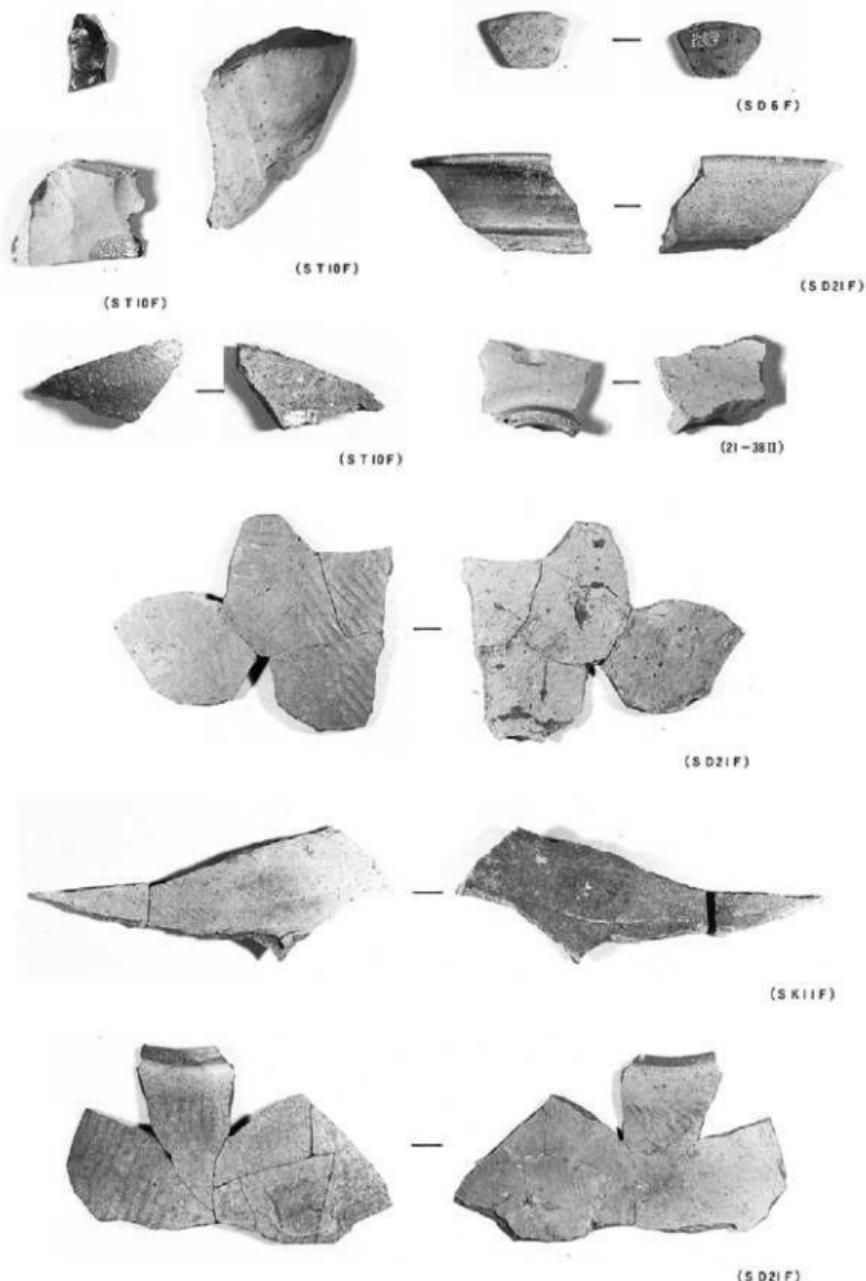
27号不明遺構 (E↑)

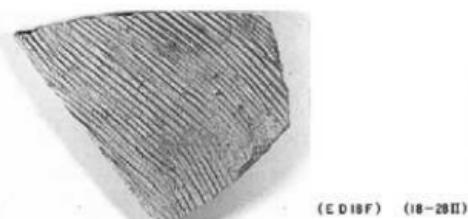
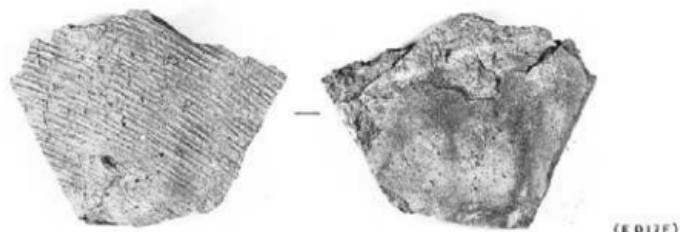
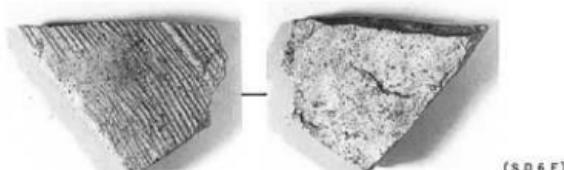
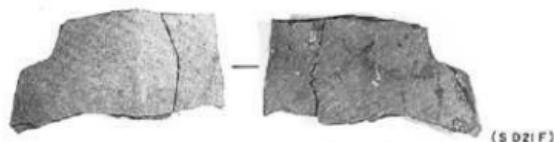
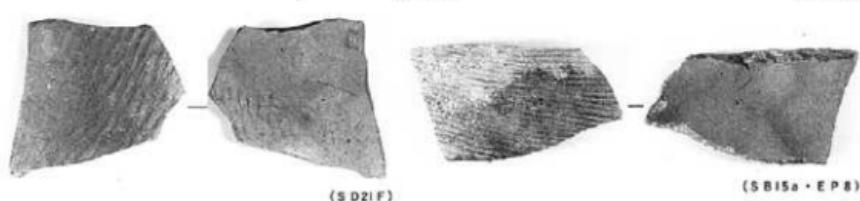


RP1 出土状態 (E ↑)



RP2 出土状態 (E ↑)





出土遺物（2）

山形県埋蔵文化財調査報告書第134集

しん たて 館 遺 跡

発掘調査報告書

昭和63年3月25日 印刷  
昭和63年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 株 田 富 印 刷 所